

父娘の絆「広美丸」

～ 亡き父の船を引き継ぎ漁業へ参入 ～

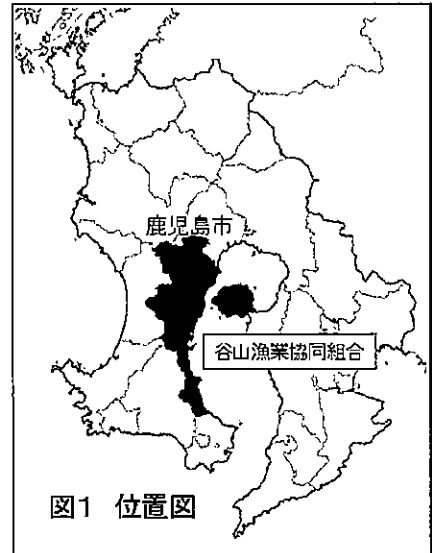
谷山漁業協同組合

右田 広美

1. 地域の概要

鹿児島市は、鹿児島県の県庁所在地で、平成16年に近隣の5町と合併し人口が60万人を超える南九州最大の都市である。市内は商工業化や宅地化が進んでいるが、桜島を望む景観は、「東洋のナポリ」とも称され年間約900万人が訪れる観光都市でもある。

鹿児島市の中心部に位置する谷山地区は、埋め立てが進み、大型の新興住宅地が造成され大規模な商業施設が進出している。



2. 漁業の概要

私の所属する谷山漁業協同組合は、正組合員50人、準組合員40人で、高齢化が進み組合員数は減少傾向にある。主な漁業種類は、刺網、定置網、潜水漁業、一本釣り等で、漁獲物は直接組合員が鹿児島中央卸売市場に出荷している。平成19年の漁獲量は、120トンであった。

3. 研究・実践活動の取組課題選定の動機

私が幼い頃の谷山地区には豊かな海が残っており、私は船と海が大好きであった。そして、いつも両親と漁に行く6歳上の兄をうらやましく思っていた。

しかし、鹿児島湾の中にバショウカジキが来遊する夏休みになると、父は私を対岸にある垂水や古江沖に一週間ほどの泊まりがけの漁に連れて行ってくれた。カジキ流網は夜間操業するので一晩中休む間がなかったが、大漁の時に鹿児島の市場に水揚げするのが楽し



図2 初代広美丸

時頃出港する。漁場に着くと網を張り、日の出前に揚げ始めて2時間ほど揚網作業を行う。午前9時頃に一旦帰港して水揚げし、朝食の後、タコツボを揚げるために再度出港する。なお、タコツボは揚げてタコを取り出した後、すぐに投入して3～4日おく。帰港してタコを水揚げした後は、身体を休めて夕方のカマス漁に備える。

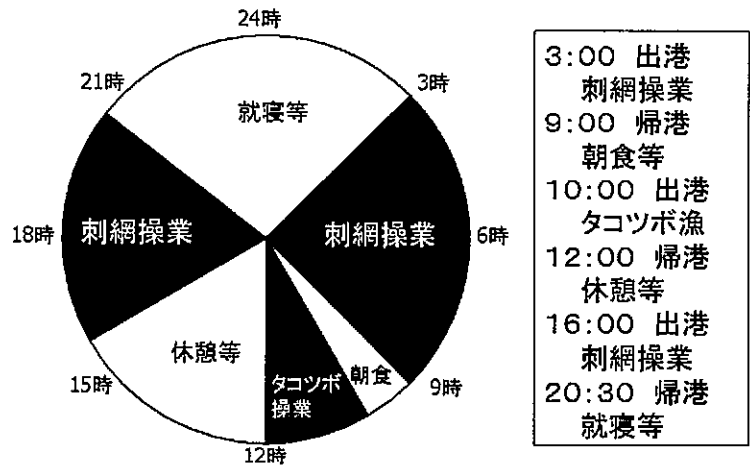


図5 カマス・モチウオ網操業スケジュール

夕方は、午後4時頃出港して暗くなってから操業し午後8時半頃戻ってくる。当日漁獲したカマス、モチウオ、タコ等はクーラーボックスに入れておき、翌朝、人に頼んで市場に出荷してもらうという毎日の繰り返しである。

私が漁に行き始めた頃は、谷山地区ではモチウオ（イボダイ）は漁獲されていなかった魚で、魚自体も知られていなかった。あるとき、叔父の小型定置網にたくさん入網し、値段も高値だと知った私たちは、他の漁協の知人に聞いていち早く網を作った。

カマスとモチウオは年によっては漁期が重なるので、カマスとモチウオの操業を交互に行ったり、漁模様を見てどちらかに絞って操業する必要がある。

ヒラメ網は漁協の取り決めで操業期間が12月1日から3月31日の4ヶ月間と決められており、ヒラメを中心に鯛やコチ、エイ、アンコウを漁獲する。漁獲したヒラメは翌朝のセリにかけるために、自分で活かして市場に車で運んでいた。

タコツボ漁は改良を重ねて陶器の壺からコンクリート、プラスチックに変え、餌もカラスガイ、カニ、アサリと変遷し、タコとの知恵比べを繰り返してきた。

また、私は自立したいという気持ちがあったので漁の合間を見ては、漁業収入の補完に努めた。まず、大潮の時に海岸に出かけてワカメ、アサリ、カラスガイ、マガキガイを採って、ワカメは葉とメカブを切り分け、マガキガイなどの貝類はうまく生かして、砂抜きなどを丁寧に行うようにしたところ市場で高値が付くようになった。また、アオアジやカマスの値段が安い時は開きを作って販売したところ口コミで広がり評判を呼ぶようになった。さらに、経費を節約するために氷や魚箱の調達も自分で行うようにした。

船に乗ると常に緊張の連続であるが、時として心温まる事もある。鹿児島湾にはたくさんのイルカが生息していて、資源を食い荒らしたり、魚を追いつぶすので、漁師からは嫌われている。

ある日、ヒラメ網を揚げている時に網にイルカがかかってしまった。イルカに近付くと、つがいか親子なのか、網にかかったイルカのそばで、もう一頭が心配そうに寄り添っていた。それを見た父は、迷うことなく「網はどうなっても良いから逃がしてやれ」と言った。

そう言われても、私の中ではその年に父が苦勞して新調した網にナイフを入れること

は心が張り裂けそうであった。暴れるイルカに「静かにして」と言いながら涙したことは忘れられない。イルカは自由を取り戻すと、仲間の群れとともに、まるで御礼を言っているかのように高くジャンプして遠ざかっていった。

私にとっては父の優しさを改めて感じる出来事であった。

幼い息子を心配して漁に行き始めた頃は、ほんの手伝い程度のつもりであったが、13年前に父がバイクで事故に遭い海に出られなくなったことがあった。その時、私は免許がないと船の管理すら出来ないことを知り、小型船舶操縦士の免許を取ったことを機に、遊漁船業や工事作業の資格も取得した。

父は、ずっと兄に後を継いでもらいたいと思っていたが、その兄は11年前に42歳の若さで他界した。

その後、頑固な父も少しずつ私に対して接し方が変わってきた。ひどい時化にあっても、泣き言一つ言わず、子供と過ごす時間を削り家庭を犠牲にしてまで父についてきた私の姿を見て、いつしか認めてくれるようになっていた。

父が船長、私が漁労長という役割で、数年前からは漁場選びを始め出漁の判断も全て任せてくれるようになった。

この20年の間には漁業以外のことも父から引き継いだ。父は港の世話役も引き受けていたので、年に3回行われるエビス祭の炊き出しや宴会等の行事に私を参加させた。このため、私は父と海岸清掃、松魚礁やタコ産卵床の設置にも積極的に参加して地元の漁師仲間と面識を深めることができた。

父が80歳を過ぎた頃からは、周りからも組合員の資格や船の名義変更の話があったが、私は父の生き甲斐が無くなりそうで先延ばしにしていた。しかし、父が82歳で重い病にかかったことで決心し、平成22年2月に谷山漁協の正組合員になった。

父はその後も体力の続く一ヶ月あまりはヒラメ網に行き、それからは入退院を繰り返しながら平成22年10月、建造後37年の船と多くの教えを残して帰らぬ人となった。



図6 谷山地区松魚礁設置



図7 在りし日の父

5. 波及効果

父が存命中は感じなかったが、初めて1人で漁業を営むようになってから色々な面で課題に直面し、色々考えることが多くなった。

女性が漁業を営むためには、力仕事や台風避難等は一人ではできないし、漁具漁法によっては女性に出来ないものもある。例えば、父と取り組んできたタコツボ漁は、漁業経営を維持するために重要な漁業であるが、壺が重く重労働で、餌の準備にも時間を要するために私一人では操業することが難しい。しかし、資源に与える影響が大きいとして漁協内で操業が制限されているカゴ網漁は、女性でも取り扱いが容易であるため、漁獲物を選択できるように改良するなどして、その使用を認めてもらうことが出来ないか検討しているところである。

父の死後は子供の世話に追われたことと、一人で出漁する不安もあったことから漁に打ち込むことが出来ない日が続いていた。しかし、父の友人から船の管理や漁の事で声をかけ続けられるうちに、周囲の視線に負けない気持ちが芽生え、父のヒラメ網を使って思い切ってお出漁したところ、仲間の漁師が獲れない日にもヒラメを漁獲することができたので、今後は、周囲のちょっとした手助けがあれば一人でも十分やっていけると自信になった。

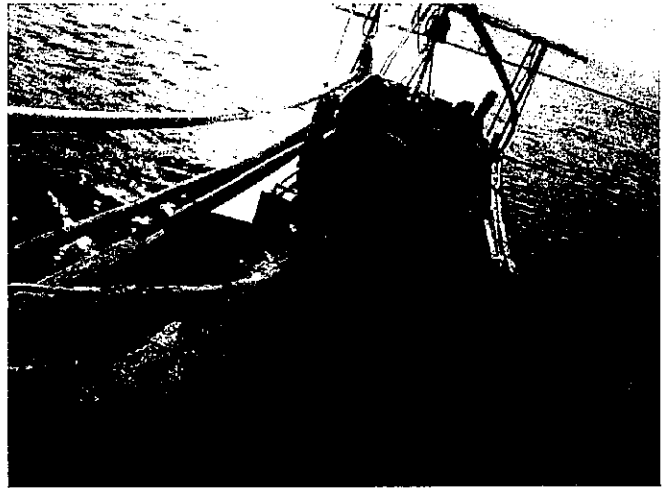


図8 ヒラメ網操業状況

監視船業務についても、「女には出来ない」という声もあった。しかし、組合長が女性だからと差別するのはおかしいと断固つっぱねたために業務を行っていくことが出来た。女性が漁業を営んでいく場合、周囲の適切な支援は不可欠であり、私に対する周りの漁業者の接し方も変わってきている。

また、今ある谷山の海の環境を守る活動も重要と考えるようになった。海の浄化や稚魚の保育場としても役立つ藻場造成とワカメやヒジキの海藻養殖にも漁協組合員の方々と共に取り組んでいきたいと思う。

そして、今後は、自分の分身である「広美丸」と共に、自分なりに自分に出来る漁業に取り組んでいきたいと考えている。そのために、まずは、加工品開発や漁法の研究のための視察研修を行い、漁業の改善や直売活動等につなげていきたい。いずれは私の漁業を確立し、漁村で漁業を行う女性漁業者の模範になれるように努力したい。

6. 今後の課題や計画と問題点

女性が漁業に参入していく為には、軽微な設備投資かつ非力な女性でも取り扱える漁具漁法の導入が不可欠だと思う。大きな力がいらぬ漁具は女性や高齢者でも効率的に操業できるので、資源に対する影響も軽視できないが、今後は、関係機関において資源に与える影響も考慮しながら漁具の開発や漁業制度のあり方についても検討していただければと思う。

また、女性が一人で海に出て行くことは、とても不安で重圧を感じる。そんな時、まわりの先輩漁業者の暖かい声かけは何よりの励みになる。「女」として見るのではなく「漁師仲間」として接してくれれば、漁業に参入しやすくなるのではないかと思っている。

女性の就業希望者にはさらに、行政や漁業団体のきめ細かい情報提供等が不可欠なので支援をお願いしなければならない。これまでは規模の大きい漁業者に情報が偏在し、女性や零細な漁業者には漁業の情報が伝わりにくかったのではなからうか。

私は自分が漁業に就業し、独立して漁業を営むようになって、ますます漁業の素晴らしさを実感している。この喜びをもっと多くの女性に知ってもらい、もっと多くの女性の漁業者が誕生することを切に願っている。